

令和5年度 学力向上指導改善プラン

| 学校教育目標                                    |   | 自ら学び たくましく 心豊かな弥生っ子の育成   |   | 4月   |   | 2～3月   |  |
|---|---|--|---|--|---|--|--|
| 推進主体                                      |   | 管理職と主幹教諭・教務主任・研究推進担当・生徒指導担当・新学習システム推進教員を中心に学力向上委員会を設置し、以下の取り組みを実施。   |   | 学力向上に向けての重点的な目標  |   | 年度末評価  |  |
| 学力に関する前年度の状況・経年の課題等                       |   |  |   | (指標となる数値等)   |   | (成果目標達成のための具体的な手立て等)   |  |
|   |   |  |   | (今年度の成果と来年度に向けた課題等)  |   | 評価   |  |
| 学<br>力<br>の<br>状<br>況                     | 全国学<br>力・学<br>習<br>調<br>査<br>結<br>果<br>の<br>状<br>況<br>(国語・算<br>数・数学<br>に関する<br>質問紙調<br>査の結果<br>も含む) | 国語   | ○全ての領域で全国平均を上回っている。<br>○「読むこと」の領域の登場人物の行動や気持ち・登場人物の相互関係・人物像や物語の全体像を問う設問では、正答率が約9割あり、叙述をもとに適切に文章を読み取る力が高まっている。<br>●「互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、自分の考えをまとめる」問題では、正答率が全国平均より高いものの課題がある。<br>●漢字を書くことについて、更なる習熟の機会が必要である。<br>●複数の情報を根拠として自分の考えを述べる活動の習熟が必要である。                  | ○話す・聞く場を設定し、書くことを中心にした思考力や表現力の向上   | ○学習の成果や成果物(説明文・新聞等)を主体的に交流する機会を増やす。<br>○「話をよく聞き、伝えたいことを伝える」児童を育むために質問紙「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広めたりすることができる」の肯定的な評価割合を80%以上にする。  | ①何のために(目的意識)、誰が(相手意識)、条件や場面に合わせる(状況意識)、表現方法(方法意識)、評価意識の観点を児童と共有し、聞く(活動)どしに書く(活動を充実させた交流活動の場を持つ。<br>②ICTを含む様々なツールを駆使して文章の構成を工夫したり、表現内容の根拠を明確にするなど、論理的に自己の考えをまとめ伝える活動の充実を図る。<br>③学習タイムにドリルパークや「聞く・トレーニング」を取り入れ、基礎学力の習熟を図る。 |  |
|   |   | 算数<br>数学   | ○全ての領域で、全国平均を上回っている。「データの活用」の領域では、正答率が10ポイント上回っている。<br>○「データの活用」では、目的に応じて円グラフを選択し、必要な情報を読み取ることや問う問題では、正答率が80%を超えていることから情報処理能力が高まっていることが伺える。<br>○基本的な計算技能等は身につけている。<br>●「数と式」領域の図形を構成する要素に着目し、平行四辺形であることを判断できる」を問う問題では、無回答率が高く、課題解決に必要な情報に着目し、それらを根拠に自己の考えを説明することに課題がある。 | ○計算力や筋道立てて説明する力を中心とした、算数科の授業改善   | ○文章題の内容を理解して必要な数量を選び、正確に立式できる児童の割合を増やす。<br>○問題解決のために、必要な条件を入れて具体的に説明できる児童の割合を増やす。<br>○上記の目標の指標として質問紙「算数の授業の内容はよく分かりますか」の肯定的な評価の割合を80%以上にする。   | ④学習タイムにドリルパークを活用し、個別最適化された知識や技能の向上を図る。<br>⑤立式の際には、式の意味を考え、ノートにまとめていくなど、自分の考えを見える化していく。<br>⑥何を問われているのか、どの数量が必要なのかを考えるために、問題文の重要な部分に線を引くなど、複数の情報を根拠にして自分の考えを論理的に説明する活動の充実を図る。<br>⑦ジャムボードを使っての意見交流を学年に応じて活用し、更に効果的な交流を行う。   |  |
|   |   | ICT機<br>器を効<br>率的に<br>活用し<br>た取<br>組<br>状<br>況   | ○「学校で、学級の友達と意見を交換する場面で、PC・タブレットをどの程度使っていますか」に全国と比較しても高い。ジャムボードを活用しての意見交流などを総合的な学習の時間を中心に行っている。<br>○週末にタブレットを自宅に持ち帰り、家庭学習に取り組んでいる。<br>○学習タイムにドリルパークを使って計算練習を行っている。   | ○ICT機器を活用した「個別最適な学び」「協働的な学び」をバランスよく取り入れ、「自らの学びを振り返り、次に生かす力を育む授業」「友だちとの対話を通し学びを深める授業」など子どもたちの主体を引き出すための授業改善 | ○質問紙の「学校で、学級の友だちと意見を交換する場面で、PC・タブレットなどのIT機器をどの程度使っていますか」で週1回以上と回答する児童の割合を60%以上にする。  |  |  |
|   | 定期テスト、単<br>元テストなど<br>による状況(各<br>教科)   | ○単元ごとにテストを実施し、未定着の児童には同じ問題や似た問題に取り組ませる等して定着するまで個別指導を行っている。(経年)   | ○「何ができるようにするか」を明確化した、主体的・対話的で深い学びのある授業実践  | ○知識の理解の質を高め各教科の資質・能力を育む。   | ⑧「めあて」「振り返り」の定着、「ベアトーク」「グループワーク」など、多様な他者との対話による問題解決等の授業に取り組む。<br>⑨各教科の学習において、主体的に学びに向かう力や問題解決能力を育成する。   |  |  |
|   | 授業等からう<br>かがる状況(各<br>教科)  | ○「話し方」「聞き方」の学校のスタンダードを作成して教室前面に掲示し、どの児童にも身につくよう指導している。(経年)   | ○読書活動の充実  | ○「読書が好き」と答える児童の肯定的な評価割合を75%以上にする。  | ⑩調べ学習や朝の読書タイムを活用し学校司書の連携による読書活動の推進を図る。<br>⑪毎月23日を「弥生読書の日」とし、家庭への啓発とともに、家族読書の日としての定着を目指す。<br>⑫「読書通帳」を積極的に活用する。   |  |  |
|   | 学<br>力<br>向<br>上<br>に<br>関<br>連<br>する<br>学<br>習<br>活<br>動<br>に<br>関<br>する<br>状<br>況                 | 全国学<br>力・学<br>習<br>調<br>査<br>の<br>質<br>問<br>紙<br>の<br>状<br>況   | ○朝食をとり、早寝早起きをしている児童が多いことから、概ね落ち着いた家庭生活を送れていると答える。<br>●平日目覚めのゲーム時間が2時間以上、学習時間が30分未満の児童が全国平均より低く、学習習慣が定着している。情報機器の使い方については、家族との約束を守れていない児童もいることから、時間も含めたルール作りについて、家庭を押し寄せている。<br>●計画を立てて学習している児童が全国平均を下回っており、宿題だけでなく、自分で計画を立てて学習や復習をする家庭学習が習慣化できるように自主学習の宿題を意図的に出す。       | ○「早寝早起き」「朝食」等の健康的な生活習慣の定着<br>○家庭での仕事や手伝いの継続による生活の自立や自己肯定感の育成<br>○主体的な学習習慣の定着                               | ○「決まった時間に就寝している」児童の肯定的な評価割合を75%以上にする。<br>○「先生はあなたがよいところを認めてくれている」と答える肯定的な評価割合を80%以上にする。<br>○「家で自分で計画を立てて勉強している」と答える児童の肯定的な評価割合を65%以上にする。  | ⑬学級活動、保健、長期休業中の宿題等で、早寝早起きや朝食をとる習慣づくりにつながる取り組みを実施する。<br>⑭生活科、学級活動、長期休業中の宿題等を通して、生活をより良くしようとする実践力を養う。<br>⑮復習や調べ学習等、宿題内容を工夫する。  |  |
| 研<br>修<br>内<br>容<br>の<br>研<br>究<br>状<br>況 | 校内研究の状況   | ○思考ツールを他教科でも活用し、児童の思考力向上や意見交流で成果が見られた。<br>○朝学習にラインシートを活用し、学年を超えて意見交流できる機会を設定できた。   | ○校内研究において、『地域や仲間と関わり合い、主体的に取り組む子ども～子どもが自ら学びをつくる授業を目指して～』のテーマに沿った研究の推進   | ○地域の「人・もの・こと」とつながる活動を仕組み、教科横断的な学習を実践する。<br>○専科や養護教諭などの実践も校内授業研究に取り込む。                                      | ⑯人と自然の博物館研究員との連携授業、校内研究に継続的に指導・助言いただいている講師の招聘により、探究的な学習を位置づけた学習の充実を図る。<br>⑰一人ひとりが輝くテーマで探究する「ミニ探究」の時間を設定し学び方を習得させ自ら学習を進める楽しさを実感させる。<br>⑱一人一回以上の研究授業や見合い授業で授業力の向上を図るとともに、学びの枝を取り入れた「弥生っ子スタンダード」授業の構築を目指す。 |  |  |
| 研<br>修<br>内<br>容<br>の<br>研<br>究<br>状<br>況 | 校内研究の状況   | ○主体的で対話的、深い学びのある授業づくりやカリキュラムマネジメントについて研修する。  | ○子どもと弥生を愛し、たくましく生きる子どもへの育成  | ○学校・家庭・地域の連携強化を図る活動への参加を推奨。  | ⑳「安全・安心・心」「ふるさと弥生」をキーワードに学校・保護者・地域の役割分担と連携を明確にし、それらの実践と検証を行う。   |  |  |
| 家<br>庭<br>・<br>地<br>域<br>等<br>の<br>状<br>況 | 家庭・地域等の状況   | ○地域・部会・自治会等に連携し、心豊かな生活を送るための機会を創出する。<br>○学校支援ボランティアの活動が定着しており、学習や行事に関わっていたりしている。<br>○読書通帳子ども教室の実施は、地域に子どもたちの居場所が位置付けられている。 | ○各学期に1回の富士中学校区4校校長会、幼小中特連絡協議会を実施。(経年)   | ○児童生徒交流部会を年2回開催し、幼小中特連絡交流会を年3回実施する。  | ㉑児童生徒間交流部会では、あいさつ運動、クリーン作戦等を推進する。<br>㉒幼小中特連絡交流会では、研修会、研究授業、幼小連携・小中連携等の企画実践を推進する。  |  |  |
| 携<br>帯<br>種<br>間<br>連<br>携                | 小・中における教科連携等の状況   | ○各学期に1回の富士中学校区4校校長会、幼小中特連絡協議会を実施。(経年)  | ○目指す児童像を共有した学校園所連携の推進   |  |   |  |  |